

- 1 寒の水飲むはや母の貌をして
- 2 白木蓮やエコーまばゆき胎児像
- 3 春の地震胎盤しかと固まりぬ
- 4 新緑や胎児腕を伸ばしそむ
- 5 臨月の妻に従ふ良夜かな
- 6 眠りたる胎児を連れて花野まで
- 7 柿を食ふ音の胎児に聴こゆるか
- 8 新涼の風を入れたり妊婦服
- 9 産声にみな力抜き萩の花
- 10 母と子を分かつ銕や秋灯下
- 11 たつぷりと胎脂拭はれ爽やげる
- 12 吾子生まれたる日の釣瓶落としかな
- 13 赤子息づくはじめての夜の長き
- 14 深く眠る赤子は秋のふところに
- 15 白秋の白の濃かりし乳含む
- 16 露冷や赤子はいつも泣きさうな
- 17 秋天を抱かむと原始反射かな
- 18 赤子はや頑固でありぬ鶏頭花
- 19 抱き上ぐる子にはじめての黄葉期
- 20 しぐるるや赤子の爪のやはらかし
- 21 十三夜泣く子抱きておちここに
- 22 冬麗やわづかに衰ふオルゴール
- 23 やはらかき骨曲げ眠る吾子の冬
- 24 冬帽子つつむ胎内よりの髪
- 25 しづかなる赤子の寢息大根煮る
- 26 我が小指握り寝る子やクリスマス
- 27 笑ひそむ子に笑はれつ年用意
- 28 哺乳瓶煮られつつあり去年今年
- 29 ひとまはり大き襁褓の初荷かな
- 30 首据りそめし子を抱く初湯かな
- 31 橙も飾りて吾子の御食初め
- 32 首据る白鳥水に置かるごと
- 33 母恋ふて泣く子を抱きて日向ぼこ
- 34 抱く子も我が着ぶくれのひとつかな
- 35 舌出せば舌を出す子や日脚伸ぶ
- 36 風邪の子を熱き息ごと背負ひけり
- 37 一旦は禿げる赤子やあたたかし
- 38 春眠を苦しと泣ける赤子かな
- 39 春の水赤子の腸を走りけり
- 40 つちふるや青強まりし蒙古斑
- 41 朧夜の息つく如き吾子の影
- 42 初めての粥は霞の如くなり
- 43 大いなる夜泣きや春の月天心
- 44 花見ゆる角度へ起こすベーカー
- 45 嬉しさを知りそむる子や李咲く
- 46 泣き厭きて眠る子に來よつばくらめ
- 47 寝返りに驚く吾子や木の芽季
- 48 涼しさや積木の塔を崩し終へ
- 49 どこまでも転がる吾子や夏蜜柑
- 50 夏立つや日々硬みつつ吾子の骨

- 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51
- いつのまに吾子舞ひそむる更衣  
 粽食ひ未だ父とはなりきれず  
 をさなごの長き咀嚼や聖五月  
 子には子の日課のあるやチューリップ  
 朝寝の子顔半分を日に浸し  
 をさなごの頬のつめたき血潮かな  
 ほろほろとをさなご歩む春野かな  
 草萌や繋ぎたる子の手の熱き  
 立春の飯粒踏みて泣く子かな  
 子の運ぶ瓶がちやがちやと春を待つ  
 立春の飯粒踏みて泣く子かな  
 小さき手に鈴握りしめ初詣  
 吾子の髪やはらかに増ゆ初鏡  
 子の運ぶ瓶がちやがちやと春を待つ  
 立冬を走つてみたき子を抱けり  
 をさなごも鳥のおもちやも初湯かな  
 十歩来てまた十歩来て息白し  
 空風をすこし温めて子の欠伸  
 歩む力脚に満つるや芋の秋  
 はじめての一步見逃す神の留守  
 晩秋の椅子のくぼみに夢見の子  
 色鳥の高さへ抱けと指す子かな  
 をさなごや梨噛みてまた一語知る  
 摺まって立つ子よそれはぼうぶらぞ  
 懸命に眠る赤子や夏木立  
 赤子には赤子のことば蛍来よ
- 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
- 蟻を追ひ来て花に遇う吾子の旅  
 吾子いつか我が詩を離る木晩道  
 やはらかき唇で削ぐ桃の肉  
 走りゆく子や炎帝を振り切つて  
 自画像は花火のごとき色の渦  
 雲の峰をさなごの脚みづみづし  
 足に乗る胴首頭闇銀河  
 夏の果濁りの残る銀の匙  
 家中におはじき散るや星月夜  
 吾子二才くちなはを見てたぢろがず  
 ままごとに檸檬転がり込んで来し  
 夕霧に吸はるる如き子の寝入り  
 すこやかにあらまほしとぞ糸瓜水  
 長椅子に立ち座りして月見の子  
 木の実降る吾子の遇ひたるものけに  
 子供山車通草の下に止まりけり  
 これやこの手遊び歌の天狗茸  
 団栗をあまたこぼして子の着替へ  
 人形の年も二才や小鳥来る  
 やがて来る友を待ちをり草の絮  
 行く秋や小さき靴に海の痕  
 公園に友また増ゆるななかまど  
 百舌鳴くや二才の群れのおそろしき  
 泣き虫の子に未来あり翳雲  
 じつと見る目は母に似て秋の虹